

## 福島秀子の抽象表現 —— 円から青へ

東京都現代美術館 金澤(新畑) 清恵

本発表は戦後の抽象画家、福島秀子(1927-1997)が制作した1950-60年代の作品を中心にその特徴を明らかにし、戦後の抽象絵画における福島の重要性を確認するものである。

福島秀子(1927-1997)は東京で生まれ、文化学院女学部卒業後、モダンアート夏期講習会に参加、その後瀧口修造のもとに集まった山口勝弘、北代省三、弟の福島和夫等とともに総合芸術グループである実験工房に参加した。北代、阿部展也等の影響を受け、人体や顔、植物等を極端にデフォルメした具象画から出発し、やがて抽象画へと移行していった。福島の画業は近年再評価が進んでおり、国内外での関心も高まりつつあるが、その制作と作品の分析においてははまだ検討の余地がある。とりわけ、60年代以降の研究はほとんど存在せず、この時代の研究を進めることが急務だと考える。

本発表ではまず、画面上に「円を押す技法(スタンピング)」について、その技法の特徴と意義を明らかにする。スタンピングは「非感情的」な形や線をもった丸い瓶の蓋等に黒い墨を塗り、濡れた紙に定着させる方法であるが、これは「単なるオートマティックな手法」ではなく、「濡れた画面ににじみ出る形態、線は意思のもと」に創られたとされる。スタンピングによる作品は、同時期の抽象芸術家たちと肩を並べて活躍し続けようとする福島が生み出した理性的表現方法で、過剰な自己表現や偶然性を極力抑えている。先行研究ではスタンピングの作品は「人」や「顔」の表現やオートスライド『水泡は創られる』に関連づけ論じられている。本発表においては、それらを踏まえ、改めて円を押すことについて考察する。押すことと描くことは明確に区別され、押された円は、写真のように断片的な時間を記録した存在であり、持続した、線としての時間ではなく、偏在した、点としての時間としての円が画面にあるのである。

1960年以降福島は、あらたな作品に挑みはじめる。福島が黒い色を捨てると語っていたように、70年代、黒は画面から次第に消え、様々な色の組み合わせによる試行を繰り返しながらも、画面に押していた円形は画面から消え去り、押しつけるものは色そのものに変化した。一時的に試行するパラフィンワックスによるコラージュ作品や青のシリーズにしても、技法への探求が己の絵画の本質であると思わせる試行の跡が見られ、スタンピングの成果は青を基調とした色の試みへと変化する。福島は「水」との関連を意識して青を用いており、円から青へと変化したのは、様式を発展させる意図があったからと考えられる。福島が新たな技法で表現の可能性を見出そうとしていたという意味で重要な変換であろう。

本発表では、いくつかの代表作と新出の作品を対象に、円形から色彩へと、絵画の形式をずらしていく作品意図について考察することで、福島の作品の全体像を明らかにする一助となることを目的とする。